
錬金術士と使い魔な猫・番外変

生野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金術士と使い魔な猫・番外変

【Nコード】

N9786T

【作者名】

生野

【あらすじ】

『錬金術士と使い魔な猫』の番外編。アイテムや世界観に関する解説、短編にするには中途半端すぎる会話集など。気まぐれ更新です。

アイテム図鑑（前書き）

イメージとしては『ア・スのアトリエ』のアイテム図鑑的な。由梨と理久の両サイドからアイテムを解説します。

アイテム図鑑

【サイラ】

お米みたいな実。うまく料理すればパエリアとかできそうなんだけど、色が紫なのがどうにも……（由梨）

南方で野菜として栽培されている。見た目や利用法はインディカ米みたいな感じらしい。（理久）

【月の欠片】

純度の高い水と月光が魔力で結晶化したもの。放っておくと薬効が消えるので採取したら早めに使う（理久）

黄水晶っぽい結晶。薬の材料にも使うけど、私的には手ごろなビーズ代わり。（由梨）

【満月のしずく】

錬金術の必須アイテム『原質溶液』を作るための材料のひとつ。

『水』の性質を担当しているらしい（理久）

満月の夜にしか取れない夜露。満月じゃないと意味が無いらしい。なんでだろ？（由梨）

【原質溶液】

調合の必須アイテム。さまざまな元素を溶かし込んだもの。老舗

のタレのごとく継ぎ足して作る。（理久）

調合の必須アイテム。これが作れて一人前の錬金術士なんだけど、あたしと理久は二人がかりじゃないとこれを作れない（由梨）

【黄金のリンゴ】

食べてよしパックにしてよし。まさに美肌の味方！問題は値段が高いことかな。（由梨）

化粧品材料として使うリンゴ。そういえば北欧神話では黄金のリンゴは不老不死の源だ。（理久）

【シャオム草】

水につけておくと泡立つようになる。シャオムは泡って意味なんだって。（由梨）

子供のイタズラに使われる草。洗浄系アイテムに使う。（理久）

【ローズ】

バラの花。バラの割に色や形が地味め。ハーブとして使う（由梨）
バラの花。薬の材料向けに改良したら、どうにもパツとしない外見になってしまった。（理久）

【ワイン】

ぶつーの赤ワイン。リュリュがたまにお裾分けしてくれる（由梨）
赤ワイン。ただし原料はブドウよりブルーベリーに似ている（理

久
)

【猫まねき】

猫に好かれるようになる香水。理久には効かない。（由梨）

猫用に調整した媚薬。師匠は何を考えてこんなもの発明したんだか。（理久）

おしどり夫婦と使い魔な猫（前書き）

もしもネタ。アーロンと由梨がくつついたら？ という方向です

おしどり夫婦と使い魔な猫

夫の名はアーロン。妻の名はユーリ。ごく普通とはいいたい二人は、ごく普通とはいいたい出会い方をし、ごく普通かもしれない恋愛をして、ごく普通……と言うのは何かおかしいが結婚した。そんな突っ込みどころ満載の夫婦だが、何より普通じゃないのは。

妻は異世界人だった。

朝、同居人が帰ってくると夫婦の一日は始まる。同居人はワケありで日中は動けず、また、妻と長時間離れているのは不信がられる立場にあった。『そんな事情でもなければとっとと逃げてる』とは同居人のボヤキだ。

「起きやがれ万年新婚ボケ夫婦！ 夜お明けんぞ！」

主寝室のドアがヤクザキックで蹴られる音で目を覚ます。どう考えても爽やかとはいいたい目覚めのはずだが夫婦には関係ない。

目が覚めたときに視界に入るのがお互いであればそれでいいらしい。

「む……おはようございます、ユーリ」

「おはようございます、アーロンさん。すぐご飯の準備、はじめますね」

「いや、もうすこしこのままで……」

朝のいちやつきをはじめようとすると、それを察したように再びドアが蹴られる。

「おら、起きろ！ アーロン、領主に呼ばれてんだろぅが！ 由梨も依頼の期限近いんだからいちやついてる暇があったら動け！」

もちろんドアの向こうにいる同居人は夫婦がどのような会話をし

ているのかは聞こえていない。だが妻のほうとは生まれた頃からのつきあいだ。行動パターンなど熟知していた。

ようやく夫婦が起きてきたところで、同居人の体に異変が起こる。服だけを残して姿を消し――服の中から鋭い目つきの猫が現れた。これが同居人の『事情』。日が出ている間は猫に変身してしまう特異体質。変身してしまった同居人を妻が抱き上げた。

「おはよう、理久」

「おー、おはよ。とつととメシにしてやれ。私は寝る」

不機嫌そうに言つて、猫はするりと妻の腕の中から逃げ出した。

昼。万年新婚家庭の離れにある工房はため息で満ちる。

「アーロンさんが帰ってくるまでまだ五時間もあるよう〜」

「ああはいはい。調査ミスんなよ。爆発起こすぞ。あと、ワインを三滴、蒸留水百で薄めてフラスコの中に入れる、だとさ」

異世界人の妻は公用語の読み書きがせいぜいだ。錬金術書に多く使われる古代語や神代語はおぼつかない。そのため、レシピの通訳は同居人の仕事だった。猫の姿でページを繰る姿はなかなかシチュールである。

「理久のなぐさめ、心こもってなーい。」

「なぐさめてすらいらないからな。大体何が悲しくて四十路男と幼馴染のラブシーンを見せつけられにやならん。しかも毎朝毎晩！」

「ら、ラブシーンだなんて……うわああ〜」

何を妄想したのか、妻がフラスコを激しく振り始める。途端にフラスコから怪しい煙が出てきたので、猫はさつさと窓から逃げ出した。

数秒後、工房から爆発音が響き、周囲の地面を軽く揺らした。

夫が帰ってくると、万年新婚家庭の夜が始まる。日が落ちると同居人の姿は人間の姿に戻る。その時点でさつさと採取なり調べ物なり言い訳をつけて逃げ出したい同居人だが、妻がそれを許さない。『みんなで夕食』は妻的ルールだった。妻が料理上手なのは知っている。問題は、夕食のときに繰り広げられる会話だ。

「兄からまた言われてしまいましたよ。早く子供の姿を見たいそうです」

「うーん、あたしもアーロンさんとの子供ほしいけど、まだ新婚気分味わいたいですっ」

「そうですね、ゆっくりいきましょうか」

「……」

会話に横槍を入れたところで慥気に巻き込まれるのは判りきっている。だから、すでに結婚五年目だろうという突っ込みはスープと共にのどの奥へ流し込んだ。

シュタインベック伯の弟夫婦は、領地でも有名なおしどり夫婦だ。二十歳の差がありながらほのぼのとしたその空気は領民の心を和ませる。

しかし、その陰で妻の使い魔……もとい同居人が常に胸焼けに悩まされていることを知る者は本人以外にいなかった。

おしどり夫婦と使い魔な猫（後書き）

もうバカップルネタは書くまいと後悔してます

光を喰らう（前書き）

もしもシリーズ第二段。【もしもアールン×理久だったら】鬱ル
トバージョンです。

コメデイの欠片ありません。

光を喰らう

豪華なソファに縛られたアーロンに対するは、粗末な木の椅子に座る敵軍の指揮官。軍服、髪、そして顔の上半分を覆う仮面。それらは全て黒一色。かの軍を指揮する青年はその顔を見せない。噂によれば二十歳そこそこで何故か夜にしか姿を現さないのだという。

「青年では、なかったわけですか」

「へえ、声を出さなくても判ったか」

仮面の人物は椅子から立ち上がり、アーロンの目の前へ歩み寄る。悠然とした仕草で外された仮面の奥から探し続けていた漆黒が見えた。

「久しぶりだな、学者馬鹿」

「リック殿……」

「招待の方法が手荒だったのは謝る。拉致って形じゃなきゃ仲間たちが納得しなかったんだ」

わずかに苦笑をにじませたその姿を懐かしいと感じた。

三年前。アーロンの実家にある領地で大規模な火災があった。周辺に人がほとんど住んでいない森が全焼しただけだった。全焼した森からは、この森に住んでいた隠者と思われる遺体が見つかった。二年前。リユース王国の北にある小国でマレビトの末裔たちが反乱を起こした。すぐに鎮圧されると思われたが、やがてマレビトたちは国を制圧。国名をスコルと変える。新制権はリユース王国国境の警備を増強した。

一年前。事態を重く見たリユース王家は、祈りの神子を中心とした使節団を派遣、対話による和解を求めるも交渉は決裂。祈りの神

子は人質となる。気がつけばリユース王国はのど元に刃が押し当てられている状態になっていた。そしてスコル軍が宣戦布告らしき文書を送ってきたのは三ヶ月前のこと。

そして今日、宮廷魔術師アーロンは城から帰る途中で何者かに拉致されたのだった。

彼女の相棒と祈りの神子は無事らしい。今は拠点で負傷者を看護していると言った。

「人質って立場取ってるけど同胞だよ。当然だろ、彼女も被害者だ。そつだ、御者と従者も怪我させてしまったからな。二人に任せてある」

自分たちの敵は、あくまでも召喚魔法を命じた者たち。そう付け加えて理久は笑う。

「故郷を、家族を、立場を——私に至っては本来の姿さえ奪われたんだ。それなりのスジを通せって言ってもバチはあたらないだろ？ …… ああ、勘違いすんな。お前にや求めてない。たかが魔術師ひとりにできることなんて知れてるからな」

アーロンに責任は求めない。かつての彼女と同じセリフだが、意味が違うことは判った。

「召喚魔法のノウハウとさまざまな条件を持っているのは、リユース王国だけだ。世界に散らばるマレビトたちにとっちゃ、諸悪の根源だな」

確かにその通りだ。マレビット召喚という切り札があるから、リユース王国は侵略されることなく強い力を保ち続けている。リユース王国に害をなせばマレビット召喚の技術が失われるかもしれない。それは人が武器を一つ失うことを意味している。ただ、この世界の人々はマレビットの事情など考えたことは無かった。ただ過ぎた力に恐れるのみ。

【マレビットに害なすものは破滅する】……この言い伝えはある意味正しい。だから人々は積極的にマレビットを攻撃しない。ただ遠ざけ、忌避し、孤立させるだけだ。だが、それは直接的な攻撃よりも深く、マレビットたちに傷を残す。そうして孤立したマレビットや子孫たちが作った集落。それがスコル軍の前身だった。

「だからその辺のことを始末つけろって要求しただけだよ、私たちは。そしたら、こんな返事が来た。『不当な暴力に屈しはしない。リユース王国は貴君らの邪悪な野望を全力で阻止する』……アホだアホだと思っちゃいたが、ほんっとーにアホだなあ、あのオヤジ。自分の不始末、全部棚に上げてやがる」

理久は楽しみに笑う。その声はどこか狂気じみていたが、瞳はいまだ正気そのものだ。彼女は狂っていない。アーロンが知る計算ずくの理久そのままだ。

「ほんとと、光の神さまは極悪だよ。こっちじゃどうだか知らんが、私をもといた世界じゃ拉致は犯罪だ。カミサマが犯罪を奨励するんだから終わってる。——だから私も正義に乗っ取った行動を取るのには止めた。そんだけの話さ」

肩をすくめながら語る姿がどこか痛々しい。ふと奇妙な予感に駆られる。まさか、理久は……

「リック殿、あなたは……」

「それで、手始めに厄介そうなのから懷柔に取り掛かったってわけ。由梨はお前と戦いたくないって言うし、お前の魔術は戦力になりそうだから」

「リック殿！」

「……何だよ、アーロン。話はまだ終わっちゃいない」

不機嫌そうなそぶり……そう、そぶり……理久はため息をついた。気づかれたくないことがあるのか、視線を合わせようとはしない。アーロンは確信した。

「あなたは……死ぬつもりですね？」

復讐など馬鹿馬鹿しい。労力の無駄だ。そう断言していた二人がこのような行動に出た。もちろん、きっかけは森の火事だろう。後でわかったことだが森を焼き払ったのは王だ。疑心暗鬼に駆られた王がわかりやすい脅威であるマレビトを消そうとしたものだった。二人が宗旨替えしてもおかしくはない。

問題は、二人の立場の違いだ。理久は体質のことであって表に出ることは無かった。対外的なことはいつも由梨の役目だった。それなのに、理久が指揮官で由梨は兵士だ。その違いが見逃せなかった。「根回しはいろいろしてある。反乱が鎮圧されてもそれはそれでいいんだよ。要はマレビトの実情を知らしめて、召喚なんでもってのほかって結論になってくれれば大成功だ。……正直、スコルを制圧しちまったのは計算外だったし」

「ですが、反乱を先導したものは死罪です」

「だから私が指揮官やってんだろうが。世論はそのへん得意な奴がいじってる。由梨も神子姫も仲間たちも……世間がマレビトに同情的になるようにね。けじめで指揮官は殺されるだろうさ。でも断頭

台に立つのは猫だ。威信がた落ちだね」

「リック……殿……」

「ああ、その通りだよアーロン。死ぬつもりだ。それとも、私を生かしたいのか？」

「当たり前です……」

残酷だ。確かに召喚魔法を命じたのは国の上層部だ。歴史はマレビト迫害を是とする風潮を作った。だが、理久から本来の姿を奪ったのはアーロンだ。せめて、どんな手段でもいいから——幸福であって欲しいと願っていたのだ。

アーロンの表情から何かを汲み取ったのか、アーロンを縛り付ける縄が切り落とされた。細切れになった縄を燃やして灰にすると、理久は不敵な笑みでアーロンを見据えた。

「……なら、私に忠誠を誓えよアーロン。この騒乱を長引かせ、マレビトの悲しみと恐ろしさをこの世界に刻み込んでみせる」

皆既日食を思わせる瞳がアーロンを射抜く。縛る縄から解き放たれたのに、それよりも強固な何かに捕らわれたような錯覚。

「落とし前、つけさせてやるよ」

アーロンの口からため息が漏れる。ようやく気がついた。二人を……理久を探していたのは責任感からでも心配からでもない。ただ、目の前から消えることが怖ろしかっただけだ。初めて彼女の本来の姿を見たときに何よりも目を引いたのは、少年めいた体軀でも、その割には白く滑らかな肌でもない。強い光を宿したその眼差しだったのだ。その眼差しが失われる？ 冗談ではない！

「だが、お前は生き延びる。神子姫と由梨と……当然仲間も逃げ延びさせる」

「……承知しました、わが主。これよりわたくしの命はあなたのものです」

魔力を補強する為の指輪がはめられた手を取って口付ける。空になりかけていた魔力を充填して忠誠の意志を現した。

「大陸屈指の魔術師が使い魔に従属する、ねえ。なかなか皮肉が効いてる」

愉快そうに笑うこの少女を生き延びさせたいと願う。たしか、まだ二十歳にもなっていないのだ。信念に殉じて死ぬには若すぎる。

「そついやスコルって名前は私が考えたんだけどさ。ある地方の神話で、世界の終末に太陽を食らう獣の名前なんだよ。そんなもの食って焼け死なないのかねえ？」

軍議や救護室代わりの広間で見せる冷静な姿とはかけ離れた発言だ。指揮官の皮を被った悲しき獣は、やがて来る結末を派手に飾ることだけを考えている。仲間を逃げ延びさせる準備だけは整えながら。

「由梨と姫にはばらすなよ。止められたら事態がややこしくなる」

だが、死なせる気はない。こんな悲しい存在を産むなら、そんな世界は根底から変えられるべきだ。

「裏切るなよ、アーロン」

「最期までお供しますよ、わが主」

万感の想いをこめて、主の手に忠誠の口付けを贈った。

光を喰らう（後書き）

『復讐スルハ』とは似て非なる設定です

錬猫アーリーデイズ（前書き）

由梨と理久が年齢一ケタのころの話。二人は母親同士が姉妹の従姉妹です。

錬猫アーリーデイズ

「理久、いるかー」

「ノックから出直せばか兄貴」

理久は兄の額めがけて定規を投げつけた。

理久は四人兄弟の末っ子で、兄が三人いる。だが妹として可愛がられた記憶はほとんどない。兄たちは理久を弟のように扱っているのだ。普段は大して不満とは思わないが、九歳になる妹の部屋にノックなしで入る次兄・颯のデリカシーの無さだけは我慢ならなかった。

「だめだよ、理久。せめて消しゴムにしてあげなつて」

「由梨ちゃんはやさしいな。可愛い妹を持つて幸せだわ、俺」

どうやら二人で宿題をしていたのだろう。理久と由梨はそれぞれ違う教科書とノートを広げていた。ここ数日、由梨は母親が出張中なので冬沢家で寝泊まりしている。

「由梨はいとこだらうが。妹は私だ」

「馬鹿言え。妹ってのは可愛いのが絶対条件だ」

理久の抗議に颯は平然と切り返す。実際、由梨は可愛い部類と言えた。クォーターの為か全体的に色素が薄く、顔もどこか日本人離れしている。さらに幼いころに父親と死別している境遇もあり、理

久の兄たちは由梨を溺愛していた。ちなみに理久たちもクォーターだが、肌が白いことと手足が長いことを除けばみごとに日本人的外見だ。

「それで、どうかしたの颯お兄ちゃん。部活お休み？」

「ああ、そうだった。実は二人に意見を聞きたいんだよ。由梨ちゃんの見解なら絶対役に立つし、理久は……まあ、何かの間違いだとは思うが、一応は女だ。参考にならないこともないだろう」

「……定規じゃなくてコンパスにしとけばよかった」

意見と言うのは、先日できた彼女との初デートコースについてだった。颯は非常に惚れっぽく、常にだれかに恋をしていると言っても過言ではない。理久たち兄妹はその性質をあきれた目で見ているが、恋バナ大好きな由梨は大乗り気で意見を出した。

「あたしは、映画とかがいいかなー」

「映画か。最近は何かやってたか？」

颯はノートの切れ端（理久のノートから無断でちぎった）に（理久のペンケースから無断拝借したペンで）『映画』と書き込み、大きく丸で囲った。理久は思い出したようにぼそつと呟いた。

「駅向こうの文芸専門の映画館で面白そうなのをやってたっけ。このあいだ、図書館で原作読んでみた」

「駅向こう！ いいんじゃないかな。最近、駅向こうにケーキが美味しいカフェができたらしいし」

「だが文芸専門か……いや、知的アピールするのにはいいかもな。何ていうタイトルだ？」

「『人形の家』」

目を輝かせる由梨に手ごたえありと感じたのだろう。ノートに切れ端に『駅向こうの映画館』『最近できたカフェ』『人形の家』と

加えていく。

「わ、なんかファンタジーな感じ」

「どんなあらずじなんだ？ 簡単に頼む」

「旦那に可愛がられるだけだった女が、自立するために旦那と家庭を捨てる話」

空気が凍りついた。どう考えても高校生の、しかも初デートに見る内容ではない。もちろん理久もそれはわかっていて。単なる嫌がらせだ。小学生が読む本ではないというツツコミは不可だ。理久は暇さえあれば本を読むタイプで、ジャンル問わず。年齢制限さえなければ何でも読む。

「……え、えーっと、映画だけがデートじゃないし。そういえば理久の理想のデートコースはどんな感じ？」

「私？ ……小学生だぞ。そんなの考えたことない」

内心冷や汗を出しつつ由梨が軌道修正を試みるも、理久の反応は冷たい。基本的に恋愛に興味が無い性格なのだ。それを知っているからか、颯も疑わしそうな目で理久を見ていた。

「でも、出かけてみたい場所とかあるでしょ？ そんなのでいいから」

「出かけたい……来月、博物館である特別展に行こうかなとは思ってる」

「妹名乗るならもつと可愛いアイディアの一つも出せ！」

由梨のフォローに、ようやく理久が意見らしきものを出す。可愛げも色気もないそのプランにさすがに我慢がならなかったらしい。颯は理久の眉間に指を突き付けた。

「じゃあ、美術館でやってるピカソの特別展か、大学博物館の化石展。そういえば今度、三十年に一度の御開帳するお寺があったっけか。あとは……」

映画の件とは反対に、こちらは理久としてはかなり本気の意見で

ある。家族旅行の時も遊園地より博物館や旧跡に行きたがる、とことん何かがずれた子供。それが理久である。

「どうしてもそっちなんだ。もつとこう、可愛い感じのない？」

「なら水族館。先週から深海魚の特別展やってるんだよ」

しぶしぶといった感じで言ったそれに、ようやく颯が安堵のため息をついた。

「なんだ、お前もやればできるじゃねえか！ よっしゃ、それが無難だろ。イルカショーもやってるしな」

「うんうん。あそこ、お土産も可愛いのいっぱいだもんね。そうしなよ、お兄ちゃん」

「由梨ちゃんも賛成なら大丈夫だろ。 そんじゃ、邪魔したな」

どうやら水族館で決定らしい。颯は鼻歌交じりに部屋を出て行った。その背中を理久は冷ややかに、由梨は期待をこめた目で見送った。

「颯おにいちゃん、うまくいくといいねー」

「一カ月もたない方に来月の小遣い全部」

「理久ひどい……」

しかし、理久は過去の経験から自分の予測が当たると確信していた。

さて、結果だが。デート自体はうまくいったらしかった。しかし二人は一週間ともたなかった。なんでも彼女の方が転校生に一目ぼれしたのだそうだ。理久はそのせいで盛大なやつあたりを喰らい、『恋愛とはハタ迷惑でばかばかしいものだ』と魂に刻み込むことになった。

錬猫アーリーデイズ・七夕変（前書き）

スペシャルサンクス：小説家になろうチャットルームの方々

鍊猫アーリーデイズ・七夕変

練った小麦粉をねじりながら、由梨はご機嫌で歌を唄っている。

「……スワンが翼を広げます……わたりなさい、わたりなさい……」

「天の川に橋をかけるのは白鳥じゃない。かささぎだ」

ねじって形を整えたものを熱した油に放り込みつつ、理久は冷静にコメントした。

今日は七夕。夕方には冬沢家と春国家が両方集まって（といっても、春国家は由梨と由梨の母だけだが）宴会をするのが通例だ。

今作っているのは索餅。そうめんの先祖となった揚げ菓子だ。

理久と由梨の祖母が日本びいきの西洋人で、その影響から冬沢家も春国家も行事食に関しては非常に厳しかった。料理はさほど得意ではないと自称する理久も、実は正月のおせち料理を全て手作りできたりする。

「もー、理久つてばロマンなさすぎ。夏の大三角は白鳥座なんだからいいじゃん」

「夏の大三角はヨーロッパ。七夕伝説は中国」

「つまらないことばかり気にしてー」

不満げに言いながらも由梨は手を止めない。ただねじるのに飽きたらしく、既にねじってあるものをつなげたり輪にしたりして遊んでいた。

「ねじり終わったなら代わってくれ。いい加減暑い」

まだ始まったばかりとはいえ、夏だ。理久は同時進行で天ぷらも揚げている。ひたすら暑い。既に汗だくだった。

「ん、いいよー」

応えて立ち上がろうとすると、リビングでそれぞれに準備をしていた兄たちから野次が飛んできた。

「却下だ、理久！」

「万が一、由梨ちゃんがやけどでもしたらどうするんだ！」

「心頭滅却すればこの程度どうってことないだろ」

言葉と共に削りかけのかつお節まで飛んでくる。確かめんつゆの準備をしていたのは……

「もったいないことするな、海斗兄貴！ これ、枕崎の一級品だつて言っただろうが！」

当たらずに床に落ちたかつお節をいったん洗って投げ返す。捨てるなどともったいないことはしない。なんといっても最高級品である。

どうやら誰かに当たったらしい。何かがぶつかる音とマヌケな声が同時に聞こえてきた。

本日のメニューはざるうどんにざるそば、さらにそうめん。炭水化物ばかりでは体に悪いので、鳥のから揚げや夏野菜の天ぷら、薬味各種も怠りない。デザートには索餅とゼリーとスイカ。

そばは長兄作、うどんとそうめんは次兄、めんつゆは三兄だ。デザートは由梨の担当で、揚げ物全般が理久の担当。そば打ち以外はくじ引きで決めたので仕方がないとは言え、これほどの貧乏くじもめったに無いと理久は思っている。

理久たちの両親は海外転勤中、由梨の母は仕事。そのため宴会は子供達だけで行われた。子供と言っても、男性陣は全員酒が呑める年齢だ。

既にできあがっている兄たちは放っておいて、由梨と理久は縁側

に陣取って笹を眺めながらデザートをつまんでいた。

「晴れてよかったねー」

藍色の地に朝顔の柄が印象的な浴衣に着替えた由梨はにこにこ笑ってゼリーをほおぼる。サイダーを使ったゼリーは爽やかな触感が特徴だ。

「叔母さん、残念だったな。今日は夜勤だっけ？」

「うん、写真撮ってきてって頼まれちゃった。だから理久も浴衣着て欲しかったのに」

「仕方ないだろ、サイズが合わなかったんだから」

由梨の浴衣は母から譲り受けたものだ。理久も母譲りのものがあるにはあるのだが、サイズが合わなかった。仕立て直すには手間がかかるということ、兄から強奪した作務衣姿だ。

「……今から作れば、夏祭りには間に合うよね」

「着ないからな」

あつさり断ってスイカを手にとった。索餅は兄たちがつまみとして消費してしまった。塩味にアレンジしたことがこんなところで仇になるとは。理久も由梨も一つずつしか食べていなかった。あれだけ暑い思いをしたというのに、である。

風が吹く。傍らに置かれた蚊取り線香から灰が飛び、理久の手にかかった。

「あちっ！」

「大丈夫？」

「……多分な」

手を振って灰を落とし、様子を見る。赤くなっていない。たいしたことはないだろう。忌々しげに蚊取り線香をにらんだ。罪がないことはわかっているが。

「そういえば、理久は短冊になんて書いたの？」

「……平穩」

「平和じゃなくて？」

「平穩。平和は世界レベルだ。私が願うことじゃない。だいたい、由梨の短冊も似たようなものだろ」

一口かじったスイカはみずみずしいが甘みは少ない。熟してないとも言えるが、理久は甘いものが好物というわけでもないのだから、くらいがちょうどいい。

笹が風に揺れる音に目を細め、由梨は見るともなしに短冊を見た。『平穩』『彼女』『健康』『免許』……やたら簡潔な内容は理久たち兄妹のものだろう。それらと並んで風に揺れる由梨の短冊は『毎日のにびり過ぎますように』だ。

「まあねー。でも、誰でも持つてる願いじゃない？」
「違う」

口の中でよりわけた種を庭に吐き出す。行儀が悪いと言って由梨が理久を小突いた。

結局、理久が由梨の浴衣を着ることはなかった。
ほどなくして、二人は異世界に問答無用で引きずり込まれることになる。

鍊猫アーリーデイズ・七夕変（後書き）

索餅……小麦粉を練ったものを縄状にねじって揚げた菓子。そうめんの祖先

行事食……おせちなどの、季節ごとに食べる料理。七夕の場合はそうめんがメジャー

由梨が歌っていた歌……タイトルは『スワンのつばさ』

枕崎……高級かつお節の産地

コメディ版のあとがきっぽいもの（前書き）

『錬金術士と使い魔な猫』 各エピソードのあとがきっぽいものです。
いつも以上に自己満足。

コメディ版のあとがきっぽいもの

【錬金術士と『使い魔』の日常】

女の子が猫を隣に座らせて店番する図。ある日そんなビジョンが思い浮かびました。それが錬猫の始まりです。

この女の子はどんな性格だろう。隣の猫は？ ……色々連想していくのは結構楽しかったです。名前は最後まで悩みました。『西洋風でも日本風でも通じる名前』を鍵に探し、最終的に女の子には友人の名前をもじったものを与え、黒猫には私に似た性質を与えることに。

由梨も理久も趣味嗜好はモデルとなった人物の影響をかなり受けています。

【私が猫になったわけ／あたしと異世界／残酷な報告】

すっげえ長い導入部です。反省してます。

それでも結構削ったんですけどね。王様とどんなやり取りがあったとか。

ちなみに王様は大昔のRPGに出てくる王様を連想してくれれば大体あってます。ただ、あんまり統治者には向いておらず、アークンを始めとした官僚はすっごく苦労してます。

【錬金術士の舞台裏／かくして流行は生まれた】

理久と由梨の役割を書いただけのお話です。

作中でも書きましたが、理久は魔力がミジンコ並み、由梨は魔法の理論がからつきしです。たとえるなら、理久は選手にはなれないけどコーチにはなれるタイプ。由梨はホームランを量産できるけど監督やコーチには絶対になれないタイプです。

この話から登場するお嬢様は李陽さんの『継続的のトラブルを持ちこむキャラなんてどうでしょう』というすばらしい提案から生まれた子です。とりあえず猪突猛進系と決めて作っていきました。

余談ですが、『かくして流行は生まれた』は、某育成シミュレーションのイベント名から拝借しました。『舌先三寸でトラブルを回避する』コンセプトだけは一致してます。

【恋愛話は似合わない】

とちくるって『恋愛要素を入れよう』なんて考えなきゃよかった。

【宛てのない手紙】

裏設定をちよつとのぞかせたかっただけの回です。

由梨はまだ赤ちゃんの時に父親と死別しています。それを不憫がった理久の母（由梨の母の姉に当たる）が『由梨ちゃんをかわいがるのよ』と息子（理久の兄たち）に言ったのがそもその始まり。ラテン系の祖母そっくりに育って美少女な従妹と、男だか女だかわからない無愛想妹。どちらをかわいがるかって言えば、ねえ？

【故郷の味再現プロジェクト】

『サイラ』は『rice』を並べ替えて適当に読んだものです。そばはうどんよりも難しいってのは主観です。うちの父が挫折した速さから割り出しました。

私は一応ニューヨーク生まれなんですが、きっぱり和食党です。母が意識して日本文化に触れさせてたからってのもありますが。

食べなれたものがどこにもないってのは結構なストレスですよ

というお話です。

【惚れ薬事件】

『かくして流行は生まれた』のもとなったゲームのイベントに着想を得ました。鍵となるアイテムだけが共通しており、ストーリーは完璧に別物ですが。

そういえば、マタビってメスや子猫には効かないらしいですね。すると追い回していたのはオスの成猫ばかりか。これが一生に一度あるというモテ期というやつでしょうか。

【錬金術士体験学習】

由梨たちを取り巻く環境をちよつと出したくて書いた話です。

アーロンは次男で、兄が一人という設定です。そのお兄さんが領主さま。悪党でも悪人でもありませんが、基本的に辛辣な人です。理久の狩りのシーンはかなり簡単に書いていますが、慣れるまでは苦労していたはずです。描写する必要が無いと思ったので省きましたが。狩りの後の祈りは、市場での情報収集で得たことのようにです。

これを書くにあたって、某動画サイトでウサギをさばく動画を見ました。案外簡単そうにさばいていたけど、実際やるとなると難しいんだろうなあ。

【空を自由に飛ぶ方法】

『錬金術士』という言葉が出てくるゲームの三作目が元ネタです。

元ネタの成功バージョンが『空飛ぶ絨毯』、失敗バージョンが『空飛ぶ袋』です。なかなか面白いムービーつきのイベントです。実際には失敗作ですが、空飛ぶ袋が開発されたら荷物運びが便利なんじゃないかという指摘が来ました。確かにそうかも。

空飛ぶ絨毯でデートを楽しむアラジンとジャスミン姫はどうして吹っ飛ばされなかったのか、ひそかに疑問です。

【石の秘密と初恋と】

この世界には石油も石炭も火薬もない。これが大前提です。昔読んだ本に書いてあったんですが、魔法にせよ技術にせよ『そうだった理由が説明できること』って重要なんだそうです。

この世界だと『魔法があるから必要だと思わなかった』に尽きます。探せば石炭も石油もあります。やろうと思えば火薬だって精製できます。でも魔法があるし今のところ困ってないからいいかと、と遠い未来、この世界にも火薬ができるかもしれません。けれどそれは由梨たちの知ったことじゃないんです。

だって、由梨たちはしょせん異邦人なんですから。

【ホムンクルス誕生？】

仮タイトルは『ホムンピクルスがホムンタルス』でした。どっちも没にしました。

ホムンクルスの材料は人間の精子＋馬の糞＋数種類のハーブ。それらを特殊なフラスコに入れて密閉、絶えず人間の生き血を与えて40日間発酵させるとできるそうです。

それをトンデモ理論でアレンジした結果、あんなのが生まれました。正直かなり後悔してます。もっとあほな話にすればよかった。

【闇市ノゴーレム】

そういえばファンタジーなのに戦わせてないなと思って書いた話です。アクションシーンに苦労したことだけが印象に残ってます。

「実質的にゴーレムがラスボス？」と言った感想をいただきましたが、だいたい合ってます。これから先も絶望的な敵なんて出てこないまま、由梨たちは異世界に骨を埋めます。

これはしょせんコメディです。ギャグです。某ライトノベルでは縦断でも死なない用務員が出てきますが、それだって世界の命運なんてかかってません。

世界を揺るがす可能性を秘めながら、自ら意識的にそれを放棄する。

それが由梨と理久の生き方です。

【エピソード】

だいたい千年後くらいというイメージです。

由梨たちがどんな発明をしたのか、何を望み何を望まなかったのか。そんなことを簡単にまとめました。

すごく余談ですが、生徒の苗字は指名した順番に頭文字がA B Cです。ちよつとした小ネタです。

百人一首なある日の出来事・天智天皇変

「今ならあの和歌の気持ちがわかるかもー……」

山の天気は変わりやすい。しかし採取地の野営でこれほどの大雨に見舞われるのは予想外だった。用意していたマントや風呂敷でとっさにテントもどきを作ったはいいが、風呂敷に穴が開いていたのはさらに予想外だった。背囊の金具にひっかけてしまっていたらしい。急ごしらえの寝袋も雨漏りで台無しになっている。

「確かに。裁縫道具はないのか？」

「あるけど、こっ暗いと縫えないよー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9786t/>

錬金術士と使い魔な猫・番外変

2011年11月5日23時29分発行